

(平成27年6月16日)

## 第12回 赤松小三郎研究会のご報告

日時 : H27. 6. 16 (火) 18:30~20:30  
場所 : 東京・文京シビックセンター 4F B会議室  
出席者 : 14名

### < 配布資料 >

- (資料1) 次の時代の政体構想を唱えた人びと～(レジメ) <沓掛忠さん作成>
- (資料2) 五箇条の誓文
- (資料3) 山本覚馬の管見
- (資料4) 年表(嘉永～慶応)
- (資料5) 大佛次郎・天皇の世紀 七 大政奉還 からの抜粋～以上、沓掛忠さんから
- (資料6) 現代語訳『逸事史補』(いつじしほ) ～小山事務局長が福井県観光営業部ブランド営業課から入手

### < 内容 >

#### 1 事務局より

- 1) 8月18日の青山教授の講演会参加申込み状況～同窓生51名、一般24名
- 2) 小山事務局長より、参考資料として「現代語訳『逸事史補』(いつじしほ)」(福井県観光営業部ブランド営業課発行)の紹介あり。これは松平春嶽が明治3年から12年にかけて記した幕末維新の逸事・逸文集(備忘録)を現代語訳したもの。

#### 2 次の時代の政体構想を唱えた人びと ～沓掛忠さん(61期)発表

- 1) 玉虫左大夫～仙台藩士で、幕末から明治維新にかけて共和政治等近代国家建設を主張した開明の進歩人。後に昌平坂学問所塾長を務める。万延元年(1860年)37歳で幕府の遣米使節団の一員に抜擢され、その航海で毎日日記をつけ、後日「航米日録」(全8巻)としてまとめ、福沢諭吉の「西洋事情」に劣らない貴重な資料となっている。最期は戊辰戦争の責任を取らされて切腹した。あまり知られていないが幕末の東北(仙台)の偉人としてこれからもっと注目されるべき人物。

以下は平山洋氏(慶応大学文学部→東北大学大学院、「西田」『前期』哲学の研究で東北大学文学博士。福沢諭吉については慶応大学で小泉仰のもとで指導を受け、1996年から本格的な研究を始めた。現在は県立静岡大学国際関係学部国際言語文化学科助教・武蔵大学人文学部非常勤講師)のレポートを参照にした発表。

2) 赤松小三郎～公儀政体論に基づく「御改正之一二端奉申上候口上書」(いわゆる「建白七策」)を慶応三年(1867年)5月に、越前前藩主松平春嶽と島津藩島津久光に提出。非常に水準の高い完備された「口上書」で、その視野の広さと西洋の政治体制への深い理解は、かえって彼の身に危険を招くことになった。

3) 嗟峨根良吉～京都宮津藩出身の洋学者。慶応二年(1866年)、海外事情に詳しいことから薩摩藩に招かれ、翌年5月に『時勢改正』の意見書(赤松小三郎の「建白七策」と内容がほとんど同じ)を薩摩藩島津久光に建議している。恐らく赤松小三郎が親しかった嗟峨根良吉を通して久光公に献上したのだろう。

4) 坂本龍馬～慶応三年(1867年)6月(赤松小三郎の「建白七策」の1か月後)、長崎から京都に向かう船中で後藤象二郎に対し口頭で伝えたといわれるのが「船中八策」。内容は「主君山内容堂より將軍徳川慶喜に大政奉還をすすめる」というもので、さらにその後の国家構想を簡潔にまとめたものだが、原本が存在しない。同年11月、「新政府綱領八策」(これは龍馬自筆のものが2枚存在する)を後藤象二郎を通して前藩主山内容堂へ上申。大政奉還後の公儀政体(ビジョン)を描き、4か月後の「五箇条の誓文」に与えた影響は大きい。

#### 5) 明治天皇の「五箇条の誓文」

慶応四年(1868年)3月、起草者は由利公正(福井藩士)。龍馬は「新政府綱領八策」を起草する直前に、土佐に味方してくれそうな松平春嶽の上京を促すため福井に赴き、そこで由利と意気投合していた。龍馬が由利に大きく影響を与えた可能性は高い。

#### 6) 山本覚馬 「管見」

慶応四年(1868年)6月、薩摩藩京屋敷に囚われていた会津藩士山本覚馬が、弟子の手助けにより完成させた。薩摩藩が今後の政権運営の参考にするために覚馬に執筆を依頼したものと考えられる。二か月前に土佐の福岡孝悌を中心にしてなされた「政体書」(『西洋事情』の復古的解釈)には曖昧な点が多く、薩摩としてはもっと明確なものを作って政権の主導権を握る意図があったのだろう。

以上

赤松小三郎研究会 事務局 荻原 貴(79期)